

- 1 はつなつの海へ海へと乗換へる
- 2 夏燕水門にある信号機
- 3 碁会所に少年多し鉄線花
- 4 たかなは空の青さをまだ知らず
- 5 離れば膨らむソファ―梅雨曇
- 6 誘はれて白夜の森の入口に
- 7 蟻走る切株のまだ濡れてをり
- 8 やはらかき水に戻りしソーダ水
- 9 刻印の顔の涼しき銀貨かな
- 10 片恋の記憶に少し金魚の朱
- 11 吊忍たつぷり濡れて売られけり
- 12 海岸のコインロッカー閉めて夏
- 13 コクトーの眠る教会朝曇
- 14 片虹や貝殻もらふだけのこと
- 15 佳き風は天の川より吹くといふ
- 16 栗紐二本使ふや稲の花
- 17 秋天を波の内より仰ぎけり
- 18 星飛ぶや縄文土器にある指紋
- 19 カーテンの長さを測る厄日かな
- 20 名月の通り過ぎゆく鉄格子
- 21 艶やかな角を持ち寄る虫合せ
- 22 ガンダムの並ぶ夜業の机かな
- 23 在来線まつすぐに延ぶ秋桜
- 24 漢文を読み下す子に秋の蝶
- 25 釣瓶落としの湖青きまま嘘を
- 26 人形の肌はなめらか秋の風
- 27 新しきカメラ文化の日を映す
- 28 鳥籠を床に並べてゐる晩秋
- 29 しめじ飯炊きあがりたるふつうの日
- 30 人の世に熊手組合ありにけり
- 31 冬の浪鎮めるごとく朗読す
- 32 託さるるサンタクロースへの手紙
- 33 その街の夜明けの色の糸編む
- 34 笑つても泣いても息の白きかな
- 35 木兎鳴いてバベルの塔の崩るるか
- 36 冬の灯のゆらと讃美歌始まりぬ
- 37 冬林檎ひとつ手渡す別れかな
- 38 トランプを伏せて雪降る岸辺まで
- 39 初旅の船のベッドの硬さかな
- 40 元日の眼鏡の縁を拭いてをり
- 41 ジーンズの足二本ある獅子頭
- 42 寒鯉を離れて餌の浮いてゐる
- 43 よく笑ふあにといもうと日脚伸ぶ
- 44 春立つやボタンを一つ押すだけで
- 45 商店街抜けて商店街や春
- 46 恋猫の集まつてくる暗さかな
- 47 春寒し切り離されてゆく車両
- 48 しばらくは人の集まる雛の間
- 49 薬に父似母似のあるらしく
- 50 猛禽のひつぱつてゐる春の紐

- 51 朧夜の西へ東へだらり帯  
52 父となる人と見てゐる桜かな  
53 春雨やジャージの袖の二本線  
54 もの焚けばグリム童話や春の山  
55 目印の鳥の巣いつも鳥をらず  
56 春宵の奏者を待つてゐるピアノ  
57 花衣ふやし箆笥を明るうす  
58 松の芯日差し集まるところまで  
59 仏生会こんなところに抜け道が  
60 ヒヤシンス手つかずにある菓子箱  
61 流鏑馬の蹄の跡や夏近し  
62 美しき順にぼうたん開きけり  
63 切り方を違へ新たまねぎサラダ  
64 彼の国の旗の隣に鯉幟  
65 もう登ることのなき木や粽食ふ  
66 絵硝子の裏のでこぼこ燕の子  
67 逆光の女佇む花菖蒲  
68 あめんぼの水輪にべつのあめんぼう  
69 湧き出づる四万六千日の音  
70 水中花アイデア浮かびては消ゆる  
71 八月の羽田空港遠くあり  
72 あみだくじひかせて虫を売りにけり  
73 秋ともし船の窓辺にコック帽  
74 雁や波に乗る人潜る人  
75 稲の香の漂ふ道を譲らるる
- 76 いくたびも観音運ぶ秋出水  
77 新蕎麦や客の着くたび席を詰め  
78 よく通る声で呼ばれし秋祭  
79 秋深し子午儀のごつと置かれあり  
80 約束の鳶の館に来て珈琲  
81 小春日や指が覚えてゐるかたち  
82 吊り橋のしぐるる島へ架かりけり  
83 てのひらの重さしんじつ冬銀河  
84 絵葉書に短き言葉クリスマス  
85 それぞれに森を離れてきて聖樹  
86 つぶやきにつぶやき返す霜の花  
87 湯たんぽの上を行進して眠る  
88 初雪や釦をひとつづつ留めて  
89 数へ日を二人で数へ始めけり  
90 洛北の寺から寺へ懐手  
91 雑音と届くラジオの初笑  
92 寒月や切れぬ鋏に戻りたり  
93 咲く色の定まつてゐる牡丹の芽  
94 実家より届く手紙と春シヨール  
95 先客のをるらし巣箱傾きて  
96 百歩ほど移る辞令や花の雨  
97 セザンヌの絵に塗り残しある遅日  
98 船宿に猫戻りゆく春の星  
99 均されて春の厚みの運動場  
100 虚子の忌の風を大きく受けにけり